

(五)	基	点	ア	さ	と	自	(四)	(三)	(二)	(一)
a	グ	か	さ	れ	視	己	<p>外からどう見えるかを導き、鏡像が自己の身体だと認識できるから。群れで育つなかで、他者の身体を捉える見方を自己にも向け、自己の身体が</p>	<p>鏡のなかで他者の身体のように映っている像が、自らの身体感覚と緊密に運動</p>	<p>しているため、それをどう捉えてよいかわからず困惑させられるから。</p>	<p>生後間もない乳児にとって、鏡に映った視覚的な身体像は自らの体性感覚と結びつかないため、他者の身体として知覚され、興味を惹く対象となるから。</p>
探索	い	ら	れ	る	覚	の				
b	そ	に	フ	は	び	イ				
半	形	捉	人	な	フ	メ				
端	成	え	間	く	け	ー				
c	さ	る	が	、	て	ジ				
客	れ	と	、	他	自	は				
頁	る	い	自	者	己	、				
	の	う	己	と	を	単				
	だ	鏡	の	共	捉	に				
	と	像	身	存	え	自				
	い	認	体	し	る	ら				
	う	知	を	、	こ	の				
	こ	の	他	他	と	体				
	と	体	看	看	で	性				
	。験	の	に	形	感	覚				
	に	視	々	成	覚					

第二問

(五)	(四)	(三)	(二)	(一)		
夜が明けるとすぐ日が暮れると感じられるほど、この世は無常だということ。	つまらない俗人の尊敬の念を、一身に受け止めたくないということ。	宝目上人が完全に俗世を捨てた境地に至っているように思われたから。	丸裸の異様な僧が清水寺の宝目上人だったと対する悲おに暮れる心情。	エ どうしようもなく終わりになりました。	イ 見間違ひであろうか。	ア 驚きあきれるほどみすばらしい様子になっている。

第三問

(四)		(三)	(二)	(一)		
				d	b	a
<p>積み重ねる必要があるということ。</p>		<p>漫然と仏道を学ぼうとするのではなく、一心不乱に集中し努力を</p>	<p>長い年月をただゆたりと気ままに無駄に過ごすこと。</p>	<p>知らず知らずのうち</p>	<p>後の時代に名残が残る</p>	<p>大まかに議論してはいけない</p>
X		X	X	X	X	X
<p>仏道を学ぶことについてだけこの上なく好んでこだわることに</p>		<p>懐疑的である必要はない。</p>				

第四問

(四)	(三)	(二)	(一)
<p>て、深く去って行った苗木屋に誇り高さを感じ、彼を慕わしく思う心情。</p>	<p>仕事をうえで引け目を感じたとき、どうにもできずにいる自分とは違っ</p>	<p>を見越して植えて、たことがわかり、その見識の高さを知ったということ。</p>	<p>苗木屋が自分たちに親しみを寄せてくれたのに、大きな樹を扱えないという理由で、彼を裏切るようにして本職の植木屋に値の張る大きな樹を注文したから。大きな樹を植えて、る本職の植木屋に引け目を感じた苗木屋が、嫌な気分を味わったとしても自業自得だと考え、夫と自分を納得させようとしたから。苗木屋が小さな木ばかり持つてくることに不満を覚えていたが、彼が数年後の成長</p>